OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	改訂される事実とフィクション : マーク・トウェインの未発表小説『それはどっちだったか』の来歴を探る
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化研究. 2017, 43, p. 77-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61280
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

改訂される事実とフィクション
―マーク・トウェインの未発表小説『それはどっちだったか』の来歴を探る―

里　内　克　巳

“Revised Fact, Revised Fiction: In Search of Fictional/ Biographical Origins of Mark Twain’s *Which Was It?*”

SATOUCHI Katsumi

This paper examines the relationship between Twain’s later novel, *Which Was It?*, and his earlier works, especially the Mississippi writings. It is not difficult to envision this novel as an attempt to reintegrate *Pudd’nhead Wilson* and “Those Extraordinary Twins.” We can also consider this novel to be a revised version of *Adventures of Huckleberry Finn*. Furthermore, we can identify an archetype from *Which Was It?* in *The Adventures of Tom Sawyer*. The depiction of the guilt-ridden protagonist of *Tom Sawyer* and his alter-ego, Injun Joe, reflects Twain’s own experiences with repentance. With help from the author’s autobiographical accounts, we can find in *Which Was It?* a counterpart to the inseparable pair of Tom Sawyer/ Injun Joe in George Harrison（awful pangs of guilt）and Jasper（a mixed-blood tormenter）.
キーワード：Twain，罪悪感，自伝性

1．読まれなかった重要作

アメリカで国民作家としての人気を博してきた文学者 Mark Twain こと Samuel Langhorne Clemens がその晩年，1899 年から 1906 年にかけて執筆した異色の未発表長編 *Which Was It?* が，*Mark Twain’s Which Was the Dream? And Other Symbolic Writings of the Later Years* のなかの一篇としてカリフォルニア大学から出版されたのは，1966 年のことである。読もうと思えば誰でも読める形になって，ほぼ半世紀が経ったにも拘わらず，この作品はほとんど評価されてこなかった。この遺稿集を編纂した研究者 John S. Tuckey は，『それはどっちだったか』に添えた短い覚書の中で，この小説は同時期に書かれた “The Man That Corrupted Hadleyburg”（1899 年）や *What Is Man?*（1906 年）といった晩年期を代表する作品と内容上の繋がりがあり，トウェイン晩年の思索を集大成するような作品であると述べている（*WWD* 178）。これは相当に高い評価だが，やはりトウェイン晩年の *Mysterious Stranger* 連作を分析した業績があるにも拘わらず，タッキー自身は研究者としてこれ以上掘り下げて『それはどっちだったか』という作品に向き合うこと

はなかった。

これまでこの小説にまともな評価が下されてこなかったのは，様々な理由が考えられる。その主要な要因は，私が見るところ二つあり，そのうち一つは初紹介のされ方に関わる。1966年に初めて日の目を見た際の遺稿集のコンセプトは，タッキーがつけた書名が示すように，トウェイン晩年の作品の中で，リアリズムから隔たった夢物語に近い作品を収録するというものだった。なるほど『それはどっちだったか』は，「どっちが夢だったか」（1897年執筆）に連なる悪夢の感触を伝える物語の系列に属する作品だが，そこからはみ出す要素も多く，幻想度という点から見る限り，やや薄味であることは否めない。それが作品の再発見を大きく妨げたのかもしれない。その一方で，アメリカ合衆国の歴史に暗い影を落としている人種問題を取り上げる側面があるという点もまた，この作品の受容に大きく影響していると思われる。この作品の終り頃で，主人公である白人男性 George Harrison は，ひた隠しにしてきた殺人の罪を元奴隷の混血男 Jasper に暴かれ，彼の恐喝に屈し，自身が奴隷同然の境遇に置かれてしまう（第20章）。このような終盤の展開は，特に人種問題を肌で実感しているアメリカ人の読み手にとってはあまりにも強烈に過ぎ，それに先立つ物語の流れに考察が届かなくなっているのかもしれない。そしてその結果，剣呑と見える作品を最初から敬して遠ざけるか，そうでなければ，その問題の部分だけに注目して何かものを言うか，といった二者択一の態度を示さざるをえなくなったのではないか。

このように深く分析されることのなかった『それはどっちだったか』を，私は日本語に翻訳し2015年に刊行したが，同時に，長めの解説を巻末に添え，この未発表小説を全体のストーリーを辿りながら分析し，トウェインの作品群のなかでの位置づけについて論じた。そこでの私の主張のポイントを整理するならば，この未発表小説は，①通常 *Pudd'nhead Wilson*（1894年）で締めくくられると考えられている，いわゆる〈ミシシッピもの〉の作品群の実質的な最終作かつ総決算的作品であること，②トウェインが生きた時代のアメリカの多人種・多民族的な様相を，より深く理解するうえで欠かすことのできない重要性を持った作品であること，③トウェインの扱うテーマが〈人種〉から最晩年の〈自己〉に移行する過渡的な時期の作品であること―以上の3点にまとめることができる。

本稿は，この解説文の続編としての性格を持ち，『それはどっちだったか』という特異な小説が，それに先立つ〈ミシシッピもの〉の作品群とどのような関係を持っているかという問題を，更に掘り下げていくことを目的とする。今回，それを考えるうえでの主たる手掛かりとなるのが，トウェインの晩年に制作されていた，口述筆記による『自伝』である。『自伝』はトウェインがそれまで何度も試みては失敗していたライフワークであった。彼は『それはどっちだったか』の筆を擱いたのと時期をほぼ同じくして，1906年の1月から本格的に口述に取り掛かり，1910年にこの世を去る直前まで取り組み続けた。『自伝』はトウェインの死後，別の人物によって選択・編集されたものが数種類刊行されたが，2010年から始まって5年がかりで，大部の完全版

『自伝』全3巻が出版されることで，その全貌がようやく明らかになった。この『自伝』は，書き手の人生をクロノロジカルに辿る通常の自伝とは異なり，連想の赴くままにトピックが移ろっていく破天荒な形式をもつ。だが，子細に読解してみると，時期をほぼ同じくして執筆されていた『それはどっちだったか』を理解するうえでのヒントとなる記述を，『自伝』から多く拾い上げることができる。この未発表小説は，トウェインの実体験（であるとされている出来事）に基づく部分が思いのほかに多いのだ。そして，小説作品の自伝的な基盤という補助線を引いて検討するならば，『それはどっちだったか』という作品が，それに先立つ『まぬけのウィルソン』や『ハックルベリー・フィンの冒険』だけでなく，更に以前に書かれた *The Adventures of Tom Sawyer*（1876年）あたりにまでその来歴を辿れることが，より明瞭に見えてくるのである。

2．登場人物のモデルを求めて

『それはどっちだったか』の来歴という問題を考えるにあたって良い出発点になるのは，〈ミシシッピもの〉の直近の作である『まぬけのウィルソン』だろう。南部の田舎町 Indiantown を舞台とする『それはどっちだったか』は，同様に南部の田舎町 Dawson's Landing を舞台とする『まぬけのウィルソン』の書き直しという性格を強く帯びた作品である。両作の類似性が，それぞれの作品の山場に目を向けてみると明瞭に浮かび上がってくることは，既に別稿で指摘した[1)]。本節では，『それはどっちだったか』の登場人物が，『まぬけのウィルソン』での登場人物を引き継ぐ形で造形されている例と，トウェインの人生に関わった実在の人物をモデルにしている例に目を向けてみたい。

まず，ハリソンが隠し続けてきた殺人の秘密を暴き出して恐喝する，問題の人物ジャスパーを取り上げてみよう。明瞭にそれと分かるジャスパーのモデルはいない。しかし，二つの作品を突き合わせてみるならば，そこに繋がりが見出せる。ジャスパーという名前の持ち主は，『まぬけのウィルソン』でも端役ながら登場するのだ。『まぬけのウィルソン』の第2章には，気丈な混血女性 Roxana（Roxy）が，仲間の使用人である純血の黒人ジャスパーと，訛りのある英語で軽妙かつ軽薄なやり取りをする場面がある。ジャスパーがロクシーに対して，今度お前に求婚してやるよ，と冗談交じりに言い寄る。ロクシーは，あんたみたいに真っ黒い男などごめんだね，ひょっとして，クーパー夫人のところの召使いのナンシーに振られたんだろう，と威勢よく答える。ジャスパーも負けずに応じ，お前やきもち焼いてるんだろう，絶対そうさ，と返す（*PW* 8–9）。『まぬけのウィルソン』の序盤で出てくるこの場面は，『それはどっちだったか』の終盤で再利用されている。そこでは，ジョージを責め苛むべくハリソン家の使用人となった混血男ジャスパーが，同家の老いた黒人召使いマーサにふざけて言い寄り，ミンストレル・シ

1）拙稿「『それはどっちだったか』とマーク・トウェインの文学―読み終えた人のための解説」の第2節「裏表のある男」を参照（437–40頁）。

ョーそこのけのやり取りを繰り広げる（*WWD* 419）。二つの場面の類似性に着目すると，二人のアフリカ系男性の名前が同一であることが偶然であるとは思えない。トウェインが部分的であるにせよ，先行作品で書き込んだ純血の黒人使用人を思い浮かべながら『それはどっちだったか』での裏表のある混血男性の一面を造形したことが，ここから推測できる。

次に，『それはどっちだったか』の中盤から大きな役割を果たし，主役の地位をハリソンから奪わんばかりの活躍をするSol Baileyという人物に移ろう。彼には実在のモデルがいる。それは作者トウェインの兄である，Orion Clemensである。『自伝』の1906年4月6日口述分には，以下のようなオーリオンに関する回想が書き込まれている。

> One morning he was a Republican, and upon invitation he agreed to make a campaign speech at the Republican mass-meeting that night. He prepared the speech. After luncheon he became a Democrat and agreed to write a score of exciting mottoes to be painted upon the transparencies which the Democrats would carry in their torchlight procession that night. He wrote these shouting Democratic mottoes during the afternoon, and they occupied so much of his time that it was night before he had a chance to change his politics again; so he actually made a rousing Republican campaign speech in the open air while his Democratic transparencies passed by in front of him, to the joy of every witness present.（*AutoMT2* 26）

ある朝，共和党支持者であったオーリオンは，その日の晩に行なわれる共和党の集会でスピーチをする約束をする。だがお昼には気が変わって，民主党の選挙活動に協力して幟をつくる。しかし晩になるとまた共和党支持に戻って約束のスピーチを行なう。そんな風にめまぐるしく政治的な信条を取り換えるオーリオンの姿が，『自伝』では活写される。これとほぼ同じ挿話が，小説でもソル・ベイリーの移り気を説明するくだりのなかに見出せる。

> One morning, in the heat of political campaign and while he was for the moment a vindictive and uncompromising democrat, a committee applied to him for mottoes and sentiments to paint upon the transparencies which were to be used in the torchlight procession that night. He promptly furnished them, and made them red-hot. Before mid-afternoon he had talked with half a dozen able and instructed whigs; and in the evening, when the democratic boys marched huzzaing by the whig mass-meeting with his abusive mottoes gaily flaring, he was up there on the platform compelling thunders of applause with a scathing and libelous and enthusiastic whig speech.（*WWD* 343–44）

ソル・ベイリーは，浮き沈みの激しい性格を持ち，気まぐれに主義主張を変える傾向がある。

そんな彼の節操のない性向は，明らかに作者の兄オーリオン・クレメンズをモデルにしている。オーリオンはまた夢想家で生活力がなく，様々な仕事を試してみても長続きせず失敗ばかりの人生を辿った。そんな不器用さも小説におけるソル・ベイリーと共通する。

そんなソル / オーリオンの姿は，トウェインの作品歴をさかのぼってみると，『まぬけのウィルソン』において，弁護士の看板を掲げたものの依頼人を獲得できず，田舎町で長い年月をもてあまして過ごす David Wilson の人物造形に垣間見ることができる。しかし，ソル / オーリオンの前身は，『まぬけのウィルソン』と抱き合わせにする形で発表された作品 “Those Extraordinary Twins” の方により顕著に認められる。というのも，上に引用したように，めまぐるしく政治的・宗教的信条を乗り換えるソル / オーリオンの姿は，「かの異形の双生児」において，まったく異なる人格や主義を持つ Luigi と Angelo というイタリア人の双子の兄弟が，シャム双生児として一つの身体を共有し，周期的にその主導権を交代させるという奇想の形ではっきりと表われているのである。

オーリオンに関する伝記的事実は，まず「かの異形の双生児」で主として活用され，その作品を経由する形で『それはどっちだったか』で再活用された―そんな道筋を認めることができる。同じ道筋を辿った例は他にもある。1897–98 年にかけて執筆された『自伝』の前準備にあたる文章には，少年時代のサム・クレメンズが家族ぐるみで世話になっていた Dr. Meredith についての記述がある（*AutoMT1* 215）[2]。さまざまの怪しげな薬を処方する藪医者もどきのメレディスを，トウェインはまず「かの異形の双生児」において，床に伏せった双子を診察する Dr. Claypool として描き（第 7 章），更に『それはどっちだったか』でも，心労から倒れ伏したジョージを診察する Dr. Bradshaw というコミック・キャラクターとして再登場させている（第 12 章）。『それはどっちだったか』が『まぬけのウィルソン』の書き直し作品だという指摘は先に行なったが，より正確に言えば，ここで書き直しの対象になった作品は一つではないという但し書きを加えた方がより正確だろう。つまり，1894 年の段階ではセットにされながらも，基本的にはそれぞれ異なる作品として出版しなければならなかった『まぬけのウィルソン』と「かの異形の双生児」の二作品を，トウェインはもう一度うまく混ぜ合わせて一つの作品として統合する試みに着手した。その結果として出来上がったのが『それはどっちだったか』という小説だと推測できる。

2）1897–98 年執筆の Hugh Meredith 医師に関するこの文章は，後に *North American Review* に連載された *Chapters from My Autobiography* の第 13 回連載分（1907 年 3 月 1 日）に組み込まれた（*Autobiographical Writings* 148）。1903 年に書かれた自伝的文章にも，この医師に関する言及がある（*AutoMT1* 188–89）。完全版『自伝』に付された注釈によれば，メレディスはトウェインの父 John Marshall Clemens がミズーリ州フロリダにいた頃から懇意にしていた友人であり，ビジネス上のパートナーでもあった（*AutoMT1* 520–21）。なお，Dixon Wecter は *Sam Clemens in Hannibal* においてメレディス医師に触れ，ジョン・マーシャル・クレメンズが 1847 年に死亡したとき，その身体を解剖する許しを未亡人となった Jane Clemens から得ようとした可能性に触れている（117）。

3.『それはどっちだったか』の自伝的基盤

『それはどっちだったか』は伝記的な事実を踏まえて書かれた部分を思いのほかに多く持つ小説ではないのか。そんな仮定を裏づけるため，ほぼ同時期に口述筆記された『自伝』を手掛かりに小説の登場人物のモデルを探す作業を更に続けてみたい。この作品には，主人公ハリソンが隠しておきたい不都合な事実を大声で周囲の人々に暴露してしまう，Dug Hapgoodという難聴の若者が登場する。苦みに満ちたこの小説に突拍子もないユーモアを添える名脇役とも言えるこのダグ・ハプグッドは，トウェインの少年時代の友人であるTom Nashを基に造形されている。1906年2月12日口述分の記述から以下を抜粋する。

> […] He got a bitter bath, but he was so close to shore that he only had to swim a stroke or two—then his feet struck hard bottom and he crawled out. I arrived a little later, without accident. We had been in a drenching perspiration, and Tom's bath was a disaster for him. He took to his bed sick, and had a procession of diseases. The closing one was a scarlet-fever, and he came out of it stone deaf. Within a year or two speech departed, of course. But some years later he was taught to talk, after a fashion—one couldn't always make out what it was he was trying to say. Of course he could not modulate his voice, since he couldn't hear himself talk. When he supposed he was talking low and confidentially, you could hear him in Illinois.（*AutoMT1* 353）

若きサム・クレメンズとトム・ナッシュは，危険だからと禁じられていたにも拘わらず，ある夜中にこっそり家を出て，氷の張る川でスケートを楽しむ。だがやがて氷が薄くなってきたことに気づいて，二人は慌てて引き返す。しかし，ナッシュだけがうまく氷を渡ることができず，冷たい水の中に落ちてしまう。彼はそれが原因で高熱を出し，耳が聞こえなくなり，声を張り上げて喋るようになったという。トウェインは1904年に故郷の町Hannibalを再訪し，老人になったナッシュとほぼ半世紀ぶりに再会した。彼は昔と変わらない霧笛のような大声を張り上げて自分に声をかけてくれた，と『自伝』には語られている（*AutoMT1* 353）。この時の体験を基にして，ダグ・ハプグッドが創造されたと推測できる。

また，1897–98年頃に執筆された『自伝』の草稿には，一家の召使いだった黒人少年Sandyが陽気に声をはりあげて歌をうたうのに苛立ったサム・クレメンズ少年が，母からこんなことを言われる挿話がある―“Poor thing, when he sings, it shows that he is not remembering, and that comforts me; but when he is still, I am afraid he is thinking, and I cannot bear it. He will never see his mother again; if he can sing, I must not hinder it, but be thankful for it. If you were older, you would understand me; then that friendless child's noise would make you glad.”（*AutoMT1* 212） アフリカ系の人々に対する見方をめぐるこのような母子のやり取りは，『それはどっちだったか』では，ジ

ャスパーの過去を知る白人女性 Charlotte Gunning と，その息子 Templeton との間の印象的な会話の形で生かされている。黒人女中が大声で歌をうたうのに苛立つテンプルトンは，どうして母さんは我慢できるんだい，と尋ねる。そんな息子に彼女は次のように応じる。

> “Stand it? I could take that poor forlorn thing to my breast for pure thankfulness when her burden lifts and lets those joy-bells ring out of her heart. Stand it? That friendless child! Lord, if she can sing, God knows, I—”
>
> The song burst out paean-like from below, at this moment, and interrupted her. The listeners heard it through to the end, then after a pause Templeton, evidently touched, said—
>
> “I see. I hadn’t looked at it in that way before…. Go on, mother.”（*WWD* 327）

この例では，テンプルトンの立場はかつてのサム・クレメンズのそれに重なり，シャーロットはサムの母親 Jane Clemens に重なる。作者の過去の体験が，物語ではやや周縁的な位置にある登場人物の言動にも生かされていることが分かる。

だが総じて言えば，『それはどっちだったか』という小説においては，作者自身と重ねて考えることが最もしやすい人物は，主人公ジョージ・ハリソンその人である。この物語の冒頭でハリソンは，自宅で起きた火事のために妻子を失い，長く孤独なやもめ暮らしを余儀なくされる。このような主人公が置かれた不幸な境遇は，お気に入りであった娘 Susie を 1896 年に喪い，作品執筆中の 1904 年には愛妻 Olivia をも失ってしまうという不幸に見舞われたトウェイン自身の晩年の姿をいやおうなく想起させる[3)]。また小説には，認知症を患ったあげく死んだ父 Andrew の葬儀が終わってから，遠い昔に死んでしまった妻子の墓前に呆然と立ちつくすジョージ・ハリソンを描く，印象的な場面がある。ここでハリソンは声をかけてくれた女友達に，自らの心情を率直に吐露する。自分は愛していた妻や娘たちが生きて帰ってきてほしいとは願わない，なぜなら，生きるのが拷問のように辛いこの世に舞い戻るくらいなら，避難所のようなお墓で安らいでいてほしいから，と彼は言う。

> “She was beautiful and good, she was precious beyond words; and they—they were the light of our life, the joy of it. They were all young, they saw all of life that was worth the living. In their innocence they took it for a boon and a reality, and never suspected it for what it is, a treachery and a sham. They died at a happy time, they were worthy of that grace; and though my heart should break with longing for them, I would still pray for strength to say God send they may come no more out of the blessed refuge of the grave!”（*WWD* 266–67）

3)「『それはどっちだったか』とマーク・トウェインの文学」の第 10 節「人生という悪夢」を参照（特に 461–62 頁）。

ここでのハリソンの台詞は，若くして死んでしまったスージーの死を悼みながら，むしろ良い年齢で娘はこの世を去ったとも考える老いたトウェイン自身の想いを綴る『自伝』1906年2月26日口述分の以下の記述に類似している。

> […] Susy died at the right time, the fortunate time of life; the happy age—twenty-four years. At twenty-four, such a girl has seen the best of life—life as a happy dream. After that age the risks begin; responsibility comes, and with it the cares, the sorrows, and the inevitable tragedy. For her mother's sake I would have brought her back from the grave if I could, but I would not have done it for my own.（*AutoMT1* 382–83）

このように，『それはどっちだったか』には作者マーク・トウェインことサミュエル・クレメンズの実人生が色濃く反映されており，登場人物の多くは，彼の家族や友人知人をモデルにして造形されている。とりわけ主人公であるジョージ・ハリソンは，トウェイン自身を投影した存在であるから，小説の枠内に留まりながらも自伝としての性格を強く持った作品として『それはどっちだったか』を理解することができる。

4．小説と自伝に見る罪悪感

ところで，この物語の主人公ジョージ・ハリソンが，作者トウェインの戯画化された自画像であるとすると，殺人を犯したジョージにとりついて離れない罪悪感が，過剰とも言える執拗さで描写されていることを，私たちはどのように考えればいいのだろう。この作品に限らず，トウェインは過去の作品においても〈良心の咎め〉という主題を何度も取り上げている。逃亡奴隷と共に旅をしつつ，友愛の心情と法が命ずる義務とのはざまで葛藤を繰り返す少年を描いた『ハックルベリー・フィンの冒険』がその典型的な例である。トウェインがこうした心的葛藤を作品の中で事あるごとに取り上げるのは，作者が抱えた何らかの個人的事情が関わっているのだろうか。この問題は非常に大きく，すっきりと解き明かすことは容易ではない。ここではひとまず『それはどっちだったか』という作品に絞って，主人公が抱く過剰な罪悪感が，作者の伝記的事実を反映するものかどうかという疑問を，『自伝』の記述を参考資料として考えてみることにしたい。

この小説に描かれているような，保身のための衝動的な殺人という罪を，サミュエル・クレメンズが犯した事実は見出すことができない。だが興味深いことに，『自伝』のなかには少年時代のサム・クレメンズが何らかの形で罪悪感を抱いた出来事が幾つか披露されている。そして，そこには『それはどっちだったか』と結び付けることが可能なエピソードも含まれている。1883年出版の *Life on the Mississippi* 第56章で触れられ，1900年に『自伝』のために執筆された文章

でも明かされている過去の体験がその一つである。

> But a boy's life is not all comedy; much of the tragic enters into it. The drunken tramp—mentioned in "Tom Sawyer" or "Huck Finn"—who was burned up in the village jail, lay upon my conscience a hundred nights afterward and filled them with hideous dreams—dreams in which I saw his appealing face as I had seen it in the pathetic reality, pressed against the window-bars, with the red hell glowing behind him—a face which seemed to say to me, "If you had not given me the matches, this would not have happened; you are responsible for my death." I was *not* responsible for it, for I had meant him no harm, but only good, when I let him have the matches; but no matter, mine was a trained Presbyterian conscience, and knew but the one duty—to hunt and harry its slave upon all pretexts and on all occasions; particularly when there was no sense or reason in it. The tramp—who was to blame—suffered ten minutes; I, who was not to blame, suffered three months.（*AutoMT1* 157–58　下線・強調は引用者による）

ここで少年時代のサムは，村の留置場に入れられている男が煙草を喫えるようにと，マッチをこっそり差し出してあげるのだが，その親切心がかえって仇となって火事が起き，男は焼け死ぬ。そのことでサムは過剰な罪悪感を抱き，死んだ男が目の前に現れて自分を責め立てるという悪夢を見るようになる。興味深いことにこの記述では，理不尽に振舞う「良心」がサム自身の外部にある存在として描かれ，本来の持ち主であるはずのサムを逆に所有物にしてしまうという，ねじれた表現がなされる。『それはどっちだったか』でのハリソンの苦悩も，まさにこのような〈私〉と〈私の良心〉との主客転倒した関係性のもとに描き出されていくのである。しかも『自伝』における上記の引用でトウェインは，制御できない罪悪感に苛まれる自分を描く文章に，「奴隷」（slave）というアメリカの黒人奴隷制を想起させる言葉をすべり込ませている。このレトリックは，『それはどっちだったか』の終盤で，ハリソンを執拗に責め立てる〈良心〉を擬人化した存在として，かつて奴隷だったジャスパーが目の前に現れ，彼を逆に支配してしまうという成り行きにぴたりと符合する。

この『自伝』の文章のすぐ後に続けてトウェインは，少年期の自分はこうした過剰な罪悪感のため，裏表のある人格を持つようになったと記している。そしてそれに至るプロセスは，悔い改めという行ないと関連付けて描かれている。先ほどの火事をはじめとして，村で様々な悲劇が起きるたび，それは自分が道徳的に悪い人間だからだとサムは考え，「また一人死んでしまった―それも僕のせいで」と独りごちる。

> It is quite true: I took all the tragedies to myself; and tallied them off, in turn as they happened, saying to myself in each case, with a sigh, "Another one gone—and on my account; this ought to

bring me to repentance; His patience will not always endure." And yet privately I believed it would. That is, I believed it in the daytime; but not in the night.（*AutoMT1* 159　下線は引用者による）

このくだりは，『それはどっちだったか』において，自らのしでかした悪事が罪のない人を次々に不幸に陥れることをハリソンが知るたびに，壁に描いた〈災厄の木〉に果実の絵を一つ一つ付け加えるという，あの印象的な場面を想起させる（第 6 章）。サムは悔い改めようと考えながら何度も眠れない夜を過ごす。だが，その気持ちは朝になると和らげられ，日がまだ明るいうちは，彼は朗らかな少年でいることができる。

My repentances were very real, very earnest; and after each tragedy they happened every night for a long time. But as a rule they could not stand the daylight. They faded out and shredded away and disappeared in the glad splendor of the sun. They were the creatures of fear and darkness, and they could not live out of their own place. The day gave me cheer and peace, and at night I repented again. In all my boyhood life I am not sure that I ever tried to lead a better life in the daytime—or wanted to. In my age I should never think of wishing to do such a thing. But in my age, as in my youth, night brings me many a deep remorse. I realize that from the cradle up I have been like the rest of the race—never quite sane in the night. When "Injun Joe" died… But never mind: in another chapter I have already described what a raging hell of repentance I passed through then. I believe that for months I was as pure as the driven snow. After dark.（*AutoMT1* 159　下線は引用者による）

ここでのサムは，屈託のない昼の顔と，後悔に苛まれる夜の顔を持った二重生活を送る少年として描かれている。こうした作者自身の描かれ方は，『それはどっちだったか』のジョージ・ハリソンや，さらにその前身と見なしうる『まぬけのウィルソン』のトム・ドリスコルといった，殺人という罪を犯した主要人物の描写に通じるものである。そのような点から考えると，トウェイン後期の小説作品に描かれる罪悪感は，自伝的な背景を持ったものだという可能性が強まってくる。そればかりか，ここに取り上げた自伝的文章は，トウェインが単独で書いた最初の小説作品である『トム・ソーヤーの冒険』とも繋がってくるようであるので，続く二つの節ではそちらに重きを置いて論を進めてみたい。

5．自伝的文章に見る〈改心〉

『それはどっちだったか』の翻訳に付した解説のなかで私は，秘密を抱えて表と裏に分裂した

生活を送る主人公の在りようは，人種・エスニシティ的なレベルでの混血性と結びつく形で描かれていることを論じた。その混血性は，やや複雑な形で表出されている。まずトウェインは，主人公ハリソンの道徳的な意味での〈二重人間〉としてのあり方を強調するため，彼にとっての〈もう一人の自分〉であるジャスパーを，白人と黒人の血を半分ずつ分け持った，人種的な意味での二重人間にした。しかも，そのジャスパーの人物造形の主要な下敷きになっているのは，トウェインが『トム・ソーヤーの冒険』に登場させた先住民と白人の混血，いわゆる〈ハーフ・ブリード〉（half-breed）である Injun Joe だと考えられる。『それはどっちだったか』の舞台となる村には，先住民が一人もいないのに「インディアンタウン」という名前がつけられている。この奇妙な事実は，主人公や彼を取り巻く住人たちが持つ，人種・エスニシティ的，そして道徳的な意味での〈混血〉性を視野に入れた時，初めて腑に落ちるのである[4]。

興味深いことに，前節の最後に独立引用した1900年執筆分の『自伝』原稿においても，インジャン・ジョーへの言及がなされていた。このくだりでは，インジャン・ジョーのモデルになった実在の人物[5]と，少年サム・クレメンズ（＝トウェイン）が深夜に抱いた激しい悔悟の念との間には何か繋がりがあることがほのめかされるものの，トウェインは，これについてはもう既に別の所で書いたから，と言いよどんで，詳しく触れない。残念ながら，完全版『自伝』第 1 巻の注によれば，このトウェインが以前に書いたと述べている文章は見つかっていない（*AutoMT1* 515）。ただしその代り，彼が念頭に置いている出来事を指し示しているとほぼ同定できる文章が，1900年の前ではなく後に書かれた原稿の中には見出せる。1906年 3 月 8 日付の口述原稿である。これは，『ハックルベリー・フィンの冒険』や『トム・ソーヤーの冒険』に登場する人物たちのモデルを明かすという趣旨の文章だが，少年時代の自分が試みては失敗した〈改心〉という主題を扱ってもいて，その点で，先に引用した1900年の文章と直接的に繋がる内容を持つ。二つの段落から構成された長い文章だが，段落ごとに分けて引用し，順番に検討してみたい。

> During Jimmy Finn's term he（Jimmy）was not exclusive; he was not finical; he was not hypercritical; he was largely and handsomely democratic—and slept in the deserted tan-yard with the hogs. My father tried to reform him once, but did not succeed. My father was not a professional reformer. In him the spirit of reform was spasmodic. It only broke out now and then,

4）「『それはどっちだったか』とマーク・トウェインの文学」の第13節「〈インディアン〉はそこにいる」を参照（468–72頁）。

5）後藤和彦は小説の Injun Joe のモデルになったとされる Joe Douglas なる人物に触れ，その出自がインジャン・ジョーの造形にあまり反映されていないと指摘する（138–39）。また，Douglas に黒人の血が流れていた可能性を踏まえて，トウェインは小説のなかの悪漢をあえて先住民にすることで，黒人に対する南部的なイデオロギーを隠蔽しようとしたのではないかと考察している（146–48）。だが，完全版『自伝』に付された注釈によれば，この Joe Douglas がハンニバルにやって来たのは1862年のことで，トウェインが少年時代にこの人物と出会った可能性は非常に低い。だから，インジャン・ジョーのモデルは未だに分かっていないというのが，注釈者の出した現時点での結論である（*AutoMT1* 531）。

with considerable intervals between. Once he tried to reform Injun Joe. That also was a failure. It was a failure, and we boys were glad. For Injun Joe, drunk, was interesting and a benefaction to us, but Injun Joe, sober, was a dreary spectacle. We watched my father's experiments upon him with a good deal of anxiety, but it came out all right and we were satisfied. Injun Joe got drunk oftener than before, and became intolerably interesting.（*AutoMT1* 397　下線は引用者による）

この文章でトウェインはまず，『ハックルベリー・フィンの冒険』に登場するハックとその父親 "Pap" のモデルが，それぞれ Tom Blankenship と Jimmy Finn という人物だったことを明かす（*AutoMT1* 397）[6]。その二人のうちジミー・フィンの方は町の飲んだくれで，トウェインの父 John Marshall Clemens が彼を改心させようとしたけれどもうまくいかなかった，とトウェインは述べている。この過去の出来事は，サッチャー判事がパップを改心させようとして失敗するという，『ハックルベリー・フィン』第 5 章結末のエピソードに生かされたと容易に推測できる（*HF* 48–49）。更にトウェインは，父クレメンズが改心させることに失敗した人物はもう一人いて，それが実在したインジャン・ジョーなのだと述べる。この段落だけを読む限りでは，別々の小説作品で利用される実在のインジャン・ジョーとジミー・フィンは，粗暴でかつ改心できない人間であるという共通性を持っており，二人は相似た人物であるような印象が与えられている[7]。

しかし次の段落に入ると，改心したくてもできないのは実は少年時代のサム・クレメンズ自身も同様だったことが明かされ，むしろサムと実在のインジャン・ジョーとの類似性の方に力点が移されていく。

I think that in "Tom Sawyer" I starved Injun Joe to death in the cave. But that may have been to meet the exigencies of romantic literature. I can't remember now whether the real Injun Joe died in the cave or out of it, but I do remember that the news of his death reached me at a most unhappy time—that is to say, just at bedtime on a summer night when a prodigious storm of thunder and lightning accompanied by a deluging rain that turned the streets and lanes into rivers, caused me to repent and resolve to lead a better life. I can remember those awful thunder-bursts and the white glare of the lightning yet, and the wild lashing of the rain against the window-panes. By my teachings I perfectly well knew what all that wild riot was for—Satan had come to get Injun Joe. I had no shadow of doubt about it. It was the proper thing when a person like Injun Joe was required

6）この文章は，*North American Review* に連載された *Chapters from My Autobiography* の第 21 回連載分（1907 年 8 月 2 日）に組み込まれた（*Autobiographical Writings* 239–44）。その際，Tom Blankenship については "Frank F." という仮名が使われている（240）。

7）Bernard DeVoto は *Mark Twain at Work* において，『トム・ソーヤー』のために書いた原稿にトウェインが施した改変を調べ，墓場の場面でのインジャン・ジョーの相棒は当初はジミー・フィン老人で，それが最終的にマフ・ポッターという人物へと発展したのだと主張している（17）。実在のインジャン・ジョーとジミー・フィンとの距離の近さ，見分けのつけにくさは，そのような見解からもサポートされうる。

in the under world, and I should have thought it strange and unaccountable if Satan had come for him in a less impressive way. With every glare of lightning I shriveled and shrunk together in mortal terror, and in the interval of black darkness that followed I poured out my lamentings over my lost condition, and my supplications for just one more chance, with an energy and feeling and sincerity quite foreign to my nature.

But in the morning I saw that it was a false alarm and concluded to resume business at the old stand and wait for another reminder.（*AutoMT1* 397–98　下線は引用者による）

ここで少年時代のサム・クレメンズは，嵐が吹きすさぶ夜にベッドで寝ている最中に，実在のインジャン・ジョーが死んだという報せを受け取る。雷鳴が轟き稲光も走る凄まじい嵐に怯えたサムは，悔い改めて，もっとまっとうな生活を送ろうと決心する。自分の救い難いありさまを嘆きながら吐露し，どうかもう一度チャンスを与えてくださいと哀れに神様に懇願する。だが，そんな切羽詰った心境であったのに，朝になってみれば気持ちが緩んでしまい，もとの自分に戻ってしまうのだった―そんな一文だけの短い段落が付け加わり，この挿話には結末がつけられる。

挿話の流れを俯瞰すると，これは実在のインジャン・ジョーが改心に失敗したという出来事から出発するものの，彼ではなくサム自身の改心できない駄目さ加減を暴露するというところに着地する，捻じれを含み込んだ文章であることが分かる。ここでは実在のインジャン・ジョーと〈私＝サム〉との区別が曖昧になっており，両者がぴたりと一致している印象を与えるのだ。他にも引用文中には，このように外で嵐が荒れ狂っている理由は自分にはよく分かっている，それは「悪魔がインジャン・ジョーを迎えに来た」からだ，とサム少年が考える一節がある。だがこのくだりは，状況から言って「インジャン・ジョー」の代わりに「私」と置き換えてみても，違和感をさほど与えないはずである。したがってこの『自伝』のための草稿において，ハンニバルに暮らしていたインジャン・ジョーなる人物は，少年サムにとっての〈もう一人の自分〉とも言える存在であり，サム自身が抱えた罪悪感や悔悟の念と深く結びついた人物として示されている。

6．原型としての『トム・ソーヤーの冒険』

このような『自伝』における，現実世界でのインジャン・ジョーとサム・クレメンズとの一体になった関係は，『トム・ソーヤーの冒険』という虚構の世界におけるインジャン・ジョーとトム・ソーヤーとの関係を理解するうえで，大きな示唆を与えてくれる。『トム・ソーヤー』が自伝的な要素を多く孕んだ作品であることは，よく知られている。知り合いであった 3 人の少年を基にして主人公トム・ソーヤーを創造したという作者自身の言葉が，作品に付された「序

文」にはあるが（*TS* 5），そのうちの一人が他ならない書き手自身であることは明らかだ。とすれば，自伝的な文章に表れた少年時代のトウェインとインジャン・ジョーとの関係は，1876年の小説におけるトムとインジャン・ジョーとの関係と相似しているのではないだろうか。Cynthia Griffin Wolffは1980年に発表した論文で，ジョーはトムの夢想が産みだした存在であり，周囲の大人の世界に反抗したいという未成熟なトムの密かな願望を反映した一種の分身なのだと指摘した。ウルフはこの洞察を直感的に引き出しているのだが，『自伝』に見られる実在のインジャン・ジョーとサム・クレメンズとの関係性は，確かにこの研究者の見解をサポートするものになっている。

インジャン・ジョーとトムを対極的な登場人物であると捉えるのではなく，むしろ一体であると考えることによって，この小説に内在する，ある不自然さにも説明をつけることができる。それはトムの抱え込む過剰な罪悪感である。ミステリ小説としての『トム・ソーヤーの冒険』の最初の山場は，トムがハックと共に深夜に墓場に行き，そこでインジャン・ジョーがDr. Robinsonを殺害するのを目撃し，逃げ帰る場面だ（第9章）。その後，検死尋問に立ち会って，ジョーではなくMuff Potterが犯人として捕まってから，長くトムは悪夢にうなされ，家族の者から不審の目を向けられる。トムの苦悩は表面的なレベルでは，ロビンソン医師を殺害した真犯人を告白できず無実の人間を罪に陥れていることに由来する。だが，それがインジャン・ジョーからの報復を恐れる気持ちから来るだけならば，このトムの気のとがめはあまりに過剰なものと言わざるを得ない。インジャン・ジョーはトムにとっての〈もう一人の自分〉であり，それゆえ潜在的なレベルでは，ロビンソン医師を殺害したのは他ならないトム自身である，そしてそこから生じる強烈な良心の呵責がトムを苦しめている―そんな小説の表面上の論理から外れた読み方をしない限り，トムが抱え込んだ過剰な怯えと良心の痛みは，十分な説明がつけられないのだ。

トムをロビンソン医師の間接的な殺害者として捉えるこの見方は，決して突飛な解釈ではない。というのも，トウェインは直後の第10章で，トムにとってのお目付け役であるAunt Pollyの言動を通して，読者にそのことをさりげなく示しているのだから。必死で墓場から戻ってきたその翌朝，いつもなら勢いよく自分を叱りつけるポリーおばさんの様子がおかしいことにトムは気づく―“After breakfast his aunt took him aside, and Tom almost brightened in the hope that he was going to be flogged; but it was not so. His aunt wept over him and asked him how he could go and break her old heart so; and finally told him to go on, and ruin himself and bring her gray hairs with sorrow to the grave, for it was no use for her to try anymore.”（*TS* 64）。ポリーおばさんがいつになく沈み込んで泣く理由が，トムの夜の無断外出だけであるならば，どうしてこんなに嘆き悲しむのか，はっきりした理由は書かれていない。ポリーおばさんの嘆きは，この時点では彼女が知っているはずのないこと，すなわち殺人事件にトムが関係したことに対する反応であるとしか

読めないのだ[8]。次の第11章も同様である。検死尋問が開かれて一週間経ってもトムは夜ごと悪夢にうなされる。〈そんなに苦しめないで―話すから〉，とうわごとを言ったのを腹違いの弟のSidに聞かれ，いったい何を話すというんだい，と朝食の席で問い詰められる。それに答える前にポリーおばさんはこんな助け舟を出す―“Sho! It's that dreadful murder. I dream about it most every night myself. Sometimes I dream it's me that done it.”（*TS* 67）。私自身が殺人を犯した夢を見ることがあるわよ，とポリーおばさんは言う。トムの内面を察することなく発せられたこの無邪気な言葉は，実はトムが苦しんでいる本当の理由についてはからずも正鵠を射るものとなっている―そんなアイロニーをトウェインは密かに狙っているのではないのか。

トムを潜在的な殺人者であると考えることがもし可能ならば，彼の人物造形は，後年の『それはどっちだったか』で殺人を犯してしまった罪悪感に苦しめられるジョージ・ハリソンの人間像に非常に近づいてくる。二つの作品を突き合わせると，複数の類似した状況を見出すことができる。濡れ衣をかけられ牢屋に入れられたマフ・ポッターにトムとハックが会いに行き，鉄格子越しにタバコとマッチを差し入れてあげる場面（第23章）もその一つだ。やましい気持ちを和らげるために訪問したのに，感激したポッターから感謝の言葉をかけられ，二人の少年は逆に激しい罪悪感に襲われてしまう―“His gratitude for their gifts had always smote their conscience before−it cut deeper than ever, this time.”（*TS* 115）。この場面は，『それはどっちだったか』において，自ら罪に陥れたウォルター・フェアファックスをハリソンが留置場に見舞いに行き，熱烈な感謝の言葉をかけられることで逆に強烈な罪悪感で心がずたずたになる場面（第8章）へと発展していく。

ここで，本稿第4節で最初に独立引用した1900年執筆の『自伝』のための文章を再び参照しておこう。留置場に入れられた浮浪者にマッチを差し出してやったら，その親切心が仇となって浮浪者が焼け死んでしまうエピソードを，以前『トム・ソーヤー』か『ハックルベリー・フィン』かどちらかで書いたはずだ，とトウェインは語っている。トウェインの記憶はあやふやだが，ここで言及されているのが，『トム・ソーヤー』のマフ・ポッターへの差し入れの挿話であることは間違いない[9]。この自伝的文章を書いたのは，トウェインが『それはどっちだったか』に取り組んでいる時期である。無実で囚われの身になった男を，その原因となった張本人が見舞いに行き，罪悪感にかえって襲われてしまうという状況が，四半世紀近くも執筆時期が離れた二つの小説作品を繋ぐ。そして双方が，差し出したマッチによって牢屋で人が焼け死んだことによる少年サム・クレメンズの後悔と罪悪感を描いた，あの自伝的文章との照応関係を持っていることになる。

8）竹内康浩は『謎解き『ハックルベリー・フィンの冒険』』において同じ箇所を引用し，『トム・ソーヤー』でのロビンソン医師殺害の場面において，目撃者（トム）と犯罪者（インジャン・ジョー）が同一人物であるという論理を引き出している（148–53頁）。私も晩年の小説と自伝での記述という別の手掛かりを経由して，竹内氏と同じ見解に至った。

9）Hamlin Hillは論考 “The Composition and the Structure of *Tom Sawyer*” において，マフ・ポッターがトムの差し入れたマッチのために焼死するプロットを構想していた可能性を，トウェインが原稿に書き込んだメモから引き出している（ノートン版270）。

もう一つだけ『トム・ソーヤー』から別の例を挙げてみよう。意を決してマフ・ポッターの公判に行き，インジャン・ジョーが真の下手人であることを明かした後も，トムの苦悩はまだ続く。英雄として町中の人気者になり，昼間は皆に対して明るく振る舞っているが，夜になると，逃亡してしまったジョーのことが気になり恐怖におののく日々が続く。第24章ではそうしたトムの様子は，以下のように描かれる。

> […] Daily Muff Potter's gratitude made Tom glad he had spoken; but nightly, he wished he had sealed up his tongue.
>
> Half the time Tom was afraid Injun Joe would never be captured; the other half he was afraid he would be. He felt sure he never could draw a safe breath again until that man was dead and he had seen the corpse.（*TS* 118–19　下線は引用者による）

「昼」と「夜」の異なる二つの顔を持つ人間に一時的にせよ変貌してしまったトム・ソーヤー。その描写は，本稿第4節の最後に独立引用した『自伝』の文章における，「昼」と「夜」に分裂したサム・クレメンズ少年の描写を彷彿とさせる。更にこの『トム・ソーヤー』からの引用箇所では，「半分」(half) に分裂したトムの在りようがことさらに強調されている。そのようなトムの姿は，先住民と白人の混血，すなわち〈ハーフ・ブリード〉であるインジャン・ジョーのそれと重なり合う。そればかりか，この引用文には，トムとインジャン・ジョーとの区別がほとんどつかなくなる瞬間がある。下線を施した "the other half he was afraid he would be [captured]." がそうだ。この箇所の意味は，「自分が（インジャン・ジョーに）捕まってしまうことをトムは恐れた」なのか，「インジャン・ジョーが捕まることをトムは恐れた」であるのか。そんな曖昧さを孕んだ "he" を含む引用部は，トム・ソーヤーとインジャン・ジョーとの一体性をさりげなく，だが確かに示すものとなっている。

7.〈改訂〉されるテクスト

本稿では『自伝』での記述を主たる手掛かりとして，『それはどっちだったか』の原型となるトウェイン作品が，執筆時期が接近した『まぬけのウィルソン』や「かの異形の双生児」だけでなく，『トム・ソーヤーの冒険』の時期にまで辿れることを明らかにしてきた。『トム・ソーヤー』は，トウェインが小説を書くための自分なりの方法を会得した最初の作品である。トウェインは物語を書いている途中でインスピレーションが枯渇することがあり，それを「タンクが空になる」という形容を使って表現した。時が経ち，また「タンクが満たされた」状態になったら，寝かせていた原稿を再び取り出して，一気に完成させる。そのような中断と再開を経て『トム・ソーヤー』は書かれたのだ―そんなトウェイン自身の言葉は，その部分だけが頻繁

に引用されて一般に流通している[10]。しかしながら，タンクの中の水の増減を比喩としたこの言葉の出典と文脈については，ほとんど顧みられることがない。実はこれは『トム・ソーヤー』出版前後に発された言葉ではなく，最晩年のトウェインが『それはどっちだったか』を書き止めた直後，1906年8月30日に口述された『自伝』のための文章においてなのである（*AutoMT2* 196）[11]。そこでトウェインは，例のタンクの水を比喩とした『トム・ソーヤー』をはじめとする主要作の創作過程について語ったそのすぐ後に，『それはどっちだったか』について話し出す。長大な『自伝』原稿の中で，この最晩年の問題作について直接的な言及が行なわれる，唯一の箇所である。

> Ever since then, when I have been writing a book I have pigeon-holed it without misgivings when its tank ran dry, well knowing that it would fill up again without any of my help within the next two or three years, and that then the work of completing it would be simple and easy. […] A like interval has occurred in the middle of other books of mine. Two similar intervals have occurred in a story of mine called "Which Was It?" In fact, the second interval has gone considerably over time, for it is now four years since that second one intruded itself. I am sure that the tank is full again now, and that I could take up that book and write the other half of it without a break or any lapse of interest—but I shan't do it. The pen is irksome to me. I was born lazy, and dictating has spoiled me. I am quite sure I shall never touch a pen again; therefore that book will remain unfinished—a pity, too, for the idea of it is (actually) new and would spring a handsome surprise upon the reader, at the end.（*AutoMT2* 196　下線は引用者による）

『トム・ソーヤーの冒険』と同様の中断と再開という経過を『それはどっちだったか』も辿ったと，トウェインはこの『自伝』のための口述原稿で明かしている。続けて，今現在は「タンクが満たされた」状態で，その気になれば完成させることはできるけれども，口述筆記の気楽さを知ってしまったので自分はもうペンを執ることはないだろう，とも述べている。最晩年に精魂を傾けて密かに取り組んできた『それはどっちだったか』について口を開くとき，30年ばかり前に書いた『トム・ソーヤー』のことが併せて語られる。このことは，執筆時期の大きな隔たりに拘わらず，この二作がトウェインの意識の中でかなりの程度に接近していた可能性を示唆している。

ともあれ，ここでトウェイン自身が遺した言葉をそのまま受け入れるならば，『それはどっちだったか』という小説はきちんとした結末をつけることができずに終わった未完の作品である

10）例えば，トウェイン研究の基本図書である Walter Blair の *Mark Twain & Huck Finn* では，出典を記すことなしにこのトウェインの言葉が引用されている（50–51）。

11）この1906年8月30日口述分の文章は，トウェインの未発表草稿を編集した Bernard DeVoto の *Mark Twain in Eruption*（1922年）において一般に読める形になった（196–200）。

ということになり，一般にもそう理解されている。しかしながら作品主題の展開のさせ方という点から見てみると，この作品が完結しているかどうかという疑問は，なお考慮に値するのである。この小説の前身作品である1899年の「インディアンタウン」が，一見して取りとめのない終わり方をするにも拘わらず，舞台となる村の名前に込められた意味が間接的に明かされる挿話を最後に持ってくることで，ある意味で上手に締めくくられているのと同様のことが，後続の『それはどっちだったか』についても言えるのではないか[12)]。ジャスパーがハリソンを恐喝して奴隷同然にしてしまうという衝撃的な出来事がもし書き込まれなかったら，主人公が抱えた罪悪感を擬人化した存在という，ジャスパーが作品で果たす役割は，決して明確にならなかったはずである。また，小説の最後の場面では，村の住人がこぞってハリソンの家に押しかけ，彼の内面の苦悩をまったく知らないまま，その高潔な人格を褒めたたえることで彼を更に苦しめる。ジャスパーもまた，素知らぬ顔でハリソンの傍に立ち，聞き耳をたてることでますます彼を責め苛む。そんな最終場面は，『自伝』で描かれたトウェイン自身の罪悪感をフィクションという形に転換させた『それはどっちだったか』という小説全体のテーマを凝縮するものになっているのである。

更にこの最終部では，『それはどっちだったか』が『ハックルベリー・フィンの冒険』の書き直し作品であるという性格が浮き彫りにされることも重要である。『ハックルベリー・フィン』の結末部では，フェルプス農場でのひと芝居でさんざん迷惑をかけた黒人ジムに，トム・ソーヤーが40ドルの金を渡し，それをジムも嬉々として受け取る（*HF* 264–65）。ここには，既に奴隷の身分からジムが解放されていることを知りながらそれを隠し，彼を自分の「冒険」の道具として長々と利用したトムの無神経さと自己満足が見え隠れしている。しかし当事者であるジム自身が沈黙することで，そのような批判的視点は小説においては封じ込められ，少なくともあからさまには表れてこない。ところが『それはどっちだったか』の場合はそうではない。この作品では，奴隷や召使いにされてきた黒人の痛みに無神経な白人側の態度がはっきりと暴露され，当の黒人側から指弾される運びとなるのだ。

問題の最終部では，人目にさらされている時だけはハリソンにかいがいしく付き従うジャスパーに対して，トム・ソーヤーと同じファーストネームを持つ若者トム・フェアファクスが，その従順さを仰々しく称賛し，褒美として10セント硬貨を手渡す。ところが後で二人きりになると，ジャスパーは受け取った硬貨をハリソンに手渡しつつ，トムの言った台詞を嘲りと共にそのまま繰り返すという成り行きになる。このように白人の住民たちの自己満足に満ちたねぎらいの言葉を嫌みたっぷりに投げ返すジャスパーの行為は，この作品の最後の一文では，書物の改訂作業のようなレトリックで表現される。

12)「『それはどっちだったか』とマーク・トウェインの文学」の第13節「〈インディアン〉はそこにいる」を参照（特に469頁）。

Jasper was hearing all this and storing it up for sarcastic use. He was always hovering in Harrison's neighborhood when it was handy to do it; partly to listen, but mainly because his listening sharpened his slave's miseries.

Ann Bailey cordially endorsed Frances Osgood's remarks, and so did Sol and his brother the minister; the widow Wilkinson and Axtell the consumptive joined the group and added their praises, and General Landry and Asphyxia Perry did likewise while Tom and Helen listened in charmed contentment and pride, all unaware that these compliments which were heaven to them were hell to Harrison; unaware, too, that he would have to hear them again, toward midnight, with Jasper to serve them up, in a new edition revised and improved.（*WWD* 428–29　下線は引用者による）

このような両作品に見られる結末部の照応に注目すると，トウェインが『それはどっちだったか』という作品を書くことになった背景として，やや遠まわしなやり方で人種の問題を扱った『ハックルベリー・フィン』を書き直したいという動機もあったのではないか，という推測ができる。もちろんこの小説で「改訂」されているのは，『ハックルベリー・フィン』だけではない。『まぬけのウィルソン』や「かの異形の双生児」，そして『トム・ソーヤー』も，変形されて『それはどっちだったか』へと取り込まれている。だから，この小説の現在見るような結末のつけ方は，複数の先行テクストの書き直しという性格を多分に帯びたこの小説の締めくくりとして，相応しいものであると言える。

付言すれば，フィクション作品だけではなく，サミュエル・クレメンズ自身の実体験を語る自伝的文章それ自体も「改訂」の産物であろうことも考慮されなければならない。『それはどっちだったか』という小説は，自伝的な要素が相当に濃厚な作品であり，この小説に描かれた主人公の内的葛藤の由来を辿れば，作者自身の少年期の精神的な葛藤に至る見通しは立てられた。ただし，『自伝』に書かれていることがそのまま伝記的事実であるという保証はない。小説作品に書いたことが同時期の自伝的な文章に影響を及ぼし，伝記的事実を虚構化しているという逆方向の可能性も視野に入れなければならない。本稿では『自伝』のテクストのみを小説作品を理解するうえでの参考資料として議論を進めた。だが，更に別の資料も利用することによって，トウェイン作品に共通してみられる罪悪感のありかをさらに詳細に精査していくことが今後の課題となるだろう。

＊本稿は，科研補助金基盤研究（C）「罪悪感の文学―マーク・トウェイン小説作品の自伝的基盤を探る」（課題番号 16K02490）の成果の一部である。日本マーク・トウェイン協会全国大会（2015 年 10 月 12 日，於　同志社大学）での口頭発表原稿に，その後の研究の進展を反映させた大幅な加筆を施した。

引用・参照文献

Blair, Walter. *Mark Twain & Huck Finn*. U of California P, 1962.

DeVoto, Bernard. *Mark Twain at Work*. Harvard UP, 1942.

――. *Mark Twain in Eruption: Hitherto Unpublished Pages about Men and Events*. Harper & Brothers, 1922.

Hill, Hamlin L. "The Composition and the Structure of *Tom Sawyer*." Twain, *The Adventures of Tom Sawyer*, Norton Critical Edition, pp.267−78. Reprinted from *American Literature*, vol.32, no.4, January 1961, pp.379−92.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*.（*HF.*）1885. Edited by Gerald Graff and James Phelan, Case Study in Critical Controversy, Macmillan, 1995.

――. *The Adventures of Tom Sawyer*.（*TS.*）1876. Edited by Beverly Lyon Clark, Norton Critical Edition, W. W. Norton, 2007.

――. *Autobiographical Writings*. Edited and Introduction by R. Kent Rasmussen, Penguin Classics, 2012.

――. *Autobiography of Mark Twain, Volume1*.（*AutoMT1.*）Edited by Harriet Elinor Smith et al., U of California P, 2010.

――. *Autobiography of Mark Twain, Volume2*.（*AutoMT2.*）Edited by Benjamin Griffin and Harriet Elinor Smith et al., U of California P, 2013.

――. *Pudd'hhead Wilson and Those Extraordinary Twins*.（*PW.*）1894. Edited by Sidney E. Berger, Norton Critical Edition, 2nd ed., 2005.

――. *Which Was the Dream? And Other Symbolic Writings of the Later Years*.（*WWD.*）Edited and Introduction by John S. Tuckey, U of California P, 1968.

Wecter, Dixon. *Sam Clemens of Hannibal*. Houghton Mifflin, 1952.

Wolff, Cynthia Griffin. "*Tom Sawyer* : A Nightmare Vision of American Boyhood." *Massachusetts Review*, vol.21, no.4, Winter 1980, pp.637−52.

後藤和彦 『迷走の果てのトム・ソーヤー―小説家マーク・トウェインの軌跡』松柏社，2000年。

里内克巳 「『それはどっちだったか』とマーク・トウェインの文学―読み終えた人のための解説」『それはどっちだったか』マーク・トウェイン作，里内克巳訳，彩流社，2015年，435−72頁。

竹内康浩 『謎解き『ハックルベリー・フィンの冒険』―ある未解決殺人事件の深層』新潮社，2015年。